
逃げ腰男と女騎士

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃げ腰男と女騎士

【Nコード】

N4091V

【作者名】

蒼

【あらすじ】

主人公、アスールは魔法学校エテルノの一年生、ただの逃げ腰野郎だったはずがある事件に巻き込まれ魔法学校同士の戦争を引き起こしてしまう。

最強の幼馴染、能力チートの校長、化け物ぞろいのクラスメイト達そんな中、最弱の主人公は生き残れるのか？

※作者の処女作ですので誤字脱字やおかしい表現があると思いますのでご了承ください。

登場人物紹介（前書き）

話が進むにつれ更新していきたいと思っています。

登場人物紹介

●アスール・レオン 15歳 男 Eランク

武器…銃 魔法…超初級の属性魔法

主人公。逃げ腰で面倒くさがりな少年、魔法が苦手で初級魔法すら失敗する事がある。

落ちこぼれ、異常者ぞろいのEクラスの中でも実力是最弱クラス

容姿…青い色の髪に青い瞳

●ロツソ・ドラゴネ 15歳 女 Aランク↓Eランク

武器…大剣 魔法…系統魔法【Z】《スラッシュ》

ヒロイン。素直でクールな騎士、戦闘力は最高ランクであるAクラスの中でトップクラス。

有名な騎士の家系であり彼女一族だけが使うことができる魔法を使う

容姿…赤い髪、赤い瞳

Eクラスのメンバー

●グリース・オツソ 15歳 男 Eランク

武器…なし 魔法…身体強化魔法（地）

アスールの親友、熊のような巨体で身体強化魔法が得意、しかし普通の魔法が全然使えないためEクラスになってしまった。優しく、非好戦的な性格

容姿…灰色の髪、銀灰色の瞳、巨体

●ベルデ・セルピンテ 15歳 男 Eランク

武器…ナイフ 魔法…？

アスールの友達、狡猾で卑怯な性格で「毒蛇ベルデ」という異名を

もつ。

入学時はAクラスだったが数週間で問題を起こしてEクラスになったらしい。

容姿…緑の髪、緑色の瞳で眼鏡を掛けている。

●アマリジヨ・パンテラ 15歳 女 Eランク

武器…鞭 魔法…魅了^{チャーム}の魔法（闇）

Eクラスの紅一点、気に入った男には魅了の魔法で寄り添ってくるが気に入らない奴には容赦ない鞭の攻撃をお見舞いしてくる、強気な性格のわりに実力はあまりない

容姿…黄色い髪と瞳、ヒョウ柄のバンダナを巻いている

●ロサード・コネツホ 15歳 男 Eランク

武器…なし 魔法…医療^{ヒール}の魔法（光）

癒しの魔法を使うEクラスの癒し担当、少女のような顔をしており他のクラスの女子に可愛がられている。性格はドM、アマリジヨに罵倒され、虐められる事が大好き。

容姿…桃色のふわふわした髪、桃色の瞳

教師陣

●レイ・クリエイター ???歳 男 校長

武器…? 魔法…?

魔法学校エテルノの校長、数百年の歴史を持つ学校の初代校長。長い間学校を離れていた、なぜ戻ってきたのか、その理由は謎。容姿…水色の髪をオールバックにしている

●アタッコ・オーロ 24歳 女 教員

武器…拳 魔法…?

エテルノの教員、男勝りで凶暴、主に攻撃魔法の授業担当。

容姿…金髪、吊り目

●ディフェーザ・アルジェント 24歳 女 教員

武器…盾 魔法…？

エテルノの教員、優しく朗らかな性格、主に防御魔法の授業担当。
Eクラス担任。

容姿…銀髪、垂れ目

第？話 自己紹介？そんなことより逃げたい

「まてっ！逃げるんじゃない、アスール！」

「しつこい！俺は行かないぞ、絶対学校なんて行かない！」

俺――アスール――は今日という日を忘れないだろう。

それと、この幼馴染――ロッソ――の事をここまで鬱陶しいと思ったのも初めてだろう。

「なぜお前はそんなにも逃げてばかりなのだ！いい加減諦めろ！」
「断る！嫌だぞ、絶対嫌だ！魔法学校なんて入学するんじゃないかった！」

「駄々をこねるな、それでも15歳か！どちらにせよ私に捕まった以上、お前の学校行きは確定している」

「iiiiiiiiいやああああだあああああつつつ！」

今、俺はロッソに連れられ（無理やり）学校行きの列車の中にいる。もうここまできたら逃げる事はできそうにないので諦める事にしよう。

さて、改めて自己紹介をしようかね。

俺の名前はアスール・レオン 魔法学校エテルノの一年生、ランクはE、面倒くさがりとよく言われる。

ロッソ・ドラゴネ、俺と同じ一年生でランクはA、有名な騎士の家系で面倒見がよく優しい女だ。

まあ、その面倒見の良さのせいでこんなことになったんだが・・・

「さあ、ついたぞ、またこれからお前と一日中お前と一緒に居られ

と思うとわくわくするぞ」

「そんな恥ずかしい事をさらっと言うな、そして俺は全然嬉しくない」

今日から二学期、正直一学期はいい思い出がない、学生寮は男女で分かれてるのにロッソが毎日入り浸るから他のルームメイトには恨まれるし、毎日授業は辛いし、逃げようとするとならとロッソに捕まるし、他にも色々あり、ろくな事がなかった。

もともと逃げ腰な俺は夏休みが終わりに近づくにつれて学校に行くのが嫌になってしまった、しかしロッソに無理やり連れてこられてしまったのである。

そして今、俺はここに来てしまった。

「む、ディフェンサ先生だ、・・・おお、アタッコ先生も居るぞ相変わらず男勝りなな先生だな」

「夏休みボケしてる奴あいねーだろーなあああ！さあ今日からまたみっちりしごいてやらあ！」

「アタッコ、生徒を脅しちゃ駄目ですよ、さて、皆さん！今日からまた頑張りましょう！、今学期は珍しく校長も帰ってきていますしね、さて」

「「お帰りなさい！皆さん！」」

こうして地獄の学園生活が始まるのだった。

第?話 自己紹介?そんなことより逃げたい(後書き)

感想等よろしくお願いします

第？話 クラスメイト紹介？逃げていい？（前書き）

今回は新キャラがたくさん出てきます。

第？話 クラスメイト紹介？逃げていい？

集会で先生方の眠くなる話を聞き、俺達は自分たちのクラスに戻った。

そういえば、結局校長は出てこず、それらしい人も居なかった。そんなに生徒の前に出たがらない人なのだろうか。

「さてアスール、私はAクラスだから一緒に居る事はできんがサボるんじゃないぞ」

「はいはい、わかりましたよーっと」

俺はロッソと別れ俺はEクラスの教室に向かった。

この学校はランクごとに教室が分かれておりA〜Eランクがある。すなわち、俺の向かうEクラスは一年生の中でもかなり弱い連中が集まるクラスである。

逆にロッソは最強ランクのAクラス、何で俺なんかと一緒に居るんだか・・・。

そんな事を思っていた矢先、突然爆音が響き、悲鳴が聞こえてきた。

「グリース！何やってんのよ！あたしの体に傷がついたらどうしてくれんのよ！」

「ご、ごめんよ、こういうのホント苦手で・・・」

「だからといってこんな超初級魔法を失敗するか？」

「けが人はいませんか？いたら治しますよ！」

「う、うーん、強化魔法なら得意なんだけどなあ」

こんな阿鼻叫喚の中、入っていきたくねーなあ。

・・・逃げるか？

「あれえ、そこにいるのアスールだよね??？なにしてんの、入ってきなよー」

・・・ちっ

「あれ、アスールじゃーん、ひっさしぶりー♪」

だきっ

「・・・おい、抱きつくな、気色悪い」

「ちよっ、相変わらずストレートな性格だねー、そこがいいんだけどにゃー」

「アスールー、また魔法失敗しちゃったよー、夏休みに練習したんだけどやっぱり上手くないんだよねえ」

俺に話しかけてきた男ーーグリースーーに答えた

「俺に相談してどうする、俺、お前と似たような実力だし、ベルデにでも聞けよ」

教室の隅でたたずんでいる男ーーベルデーーの方を向いて言った

「教えてやっていたぞ？だがグリースにはもうこれ以上無理だ、まあ身体強化魔法の方が向いているようだしそっちを集中的に鍛錬したらどうだ？どちらにせよ俺はもう手伝う気はない」

「そ・ん・な・こ・と・よ・り、どうアスール、夏休みの間にさらに魅力的になったと思わない？ほらほら、見よ！このおっぱ」

「やめろ、それにお前、チャームの魔法使ってるだろ、そうでもなきやお前の絶壁胸がどうにかなるわけないだろ」

「な、なんですっ」「確かにアマリジョさんの胸がこんな短い期間で大きくなるとは思えませんしね」

「るっさい！黙ってるロサード！」

バキッボコッ

「ああ・・・さすがアマリジョさん、気持ちいい箇所を的確に殴ってくれる・・・」

「キモイ！！！」

殴られて悦んでる奴——ロサード——にそいつを殴っている女——アマリジョ——こいつら四人はクラスメイトの中でも仲のいい連中だ

「アスール？どうしたの？」

「いや、ただ相変わらずこのクラスは」

めんどくせえ奴が多いなと思ったただけだ。

第？話 クラスメイト紹介？逃げていい？（後書き）

次回は人物紹介や世界観の説明をしたいと思います。
感想等よろしくお願いします。

第？話 諦める事を諦めない

「ねえアスール、授業受けないの？」

「めんどくさい、それにお前だってサボってるじゃねえか」

「そ、それはそうだけど・・・」

どうも、アスールです、今日から授業日でクラスの皆さんも真面目に授業を受けていると思います。

俺？モチロン逃げました。

一緒にいるのはなぜかついてきた 그리스、そしてベルデがいる。

「おいベルデ、お前こんな所でサボってていいのか？一学期は『Aクラスに戻る！』とか言ってたじゃねえか」

そう、ベルデは元Aクラスなのだ、しかし問題を起こしてEクラスに転入してきたのだ。

「ああ、その事はもういい・・・このクラスの方が面白いしな、それにあの程度の授業、今更オレには受ける必要などない」

さいですか

「ねえアスール、やっぱ戻ろうよ、あーちゃんやロサは授業受けてるし・・・」

「だったらお前は戻ってろよ、今なら間に合うぞ、多分」

授業受けてるって言ってもどうせアマリジョは寝てるしロサもボーっとしているだけだろうが。

「止めておけ、今は基本魔法の実習だ、また教室破壊する気か？」

「うゝ、じゃあ、ベルデ・・・」

「手伝わんぞ」

「アス―「断る」

「はぁ・・・アスール、そのすぐ諦める癖直したら？」

「いやいや、俺だって諦めないことがあるぞ」

「え、諦めない事？なに？」

「俺は、諦めることを諦めない」

「・・・なんか矛盾してない？」

「結局諦めてるよな、それ」

「いつからこんな諦めが速くなったんだろうね、アスールは、前はこんなじゃなかったのに・・・」

それもそうだよなあ

俺、いつからこんなになったんだっけ？

「嫌なら放っておいてくれていいんだぜ、別に」

「大丈夫」

？

「僕がアスールを見捨てる、それだけは、絶対無い」
グリース・・・嬉しいが、なんか重い。

「俺もお前を放っておく気はない、お前という娯楽がない人生なんぞつまらんだけだ」

俺はお前のオモチャか？

「つーか、俺はどんだけ期待されてんだ？」

「んー、なんだか期待しちゃうんだよねえ、色々と」

「ああ、お前ならなんだかでかい事をやる気がする」

「そう言われる奴に限って中小企業の課長あたりで終わる気がするんだよな」

キイ・・・

「あ、こんな所にいた、アマリジヨさーん、いましたよー」

「あーいたいた、起きたらあんた達居ないんだもん、探しに来ちゃったよ」

「おう、お前らもサボるか？」

「おーう！サボるサボる！」

「いいの？あーちゃん、ロサ」

「はい、どうせ授業なんて聞いていないですし」

「じゃ、今日はここでダラダラ「させねえよ」

「「「「「な!」」」」」

「ア、アタツコ先生・・・」

「初日から授業サボるたあいい度胸だな、てめえ等、来やがれ! み
つちり説教・・・いない!?」

「ア、アスール! 置いてかないでよ!」

「逃げ足だけならAランクだな、お前」

「むしろ僕は捕まって説教くらいいたい・・・」

「何馬鹿な事言ってるの! 逃げるわよ!」

「まてえ! にげんじゃねえ!」

「待てといわれて待つ奴あ」

「「「「「いねえ!!!」」」」」

第?話 諦める事を諦めない(後書き)

感想、意見等よろしくお願いします。

第？話 朱の騎士（前書き）

ヒロイン久々に登場

第？話 朱の騎士

前回、俺達はサボっていた所をアタック先生に見つかり逃げ出した。
・・・が、そのまま捕まっとけばよかった、と思うような事態に陥った。

「おいベルデ！お前Aランクだろ！？なんとかしろお！！」

「元だ！お前こそ逃げるだけじゃなく何か手を打て！」

俺たちは追われていた、先生、にではない
化け物・・・魔獣、という奴にだ。

「おい！誰かどうにかできる奴はいねえか！？」

一応、聞いてはみる・・・が

「無理！無理だよう！ベヒモス相手に素手で勝てるわけないよお！」

「あたしの魅了^{チャーム}は人にしか効かないのよ！」

「医療魔法^{ヒーリング}しか使えません！」

「無理」

上からグリース、アマリジヨ、ロサード、ベルデ

・・・だめだこりゃ

「アスール！武器、銃持ってきてないの！？」

「サボる気で学校来たから寮に置いてきた！」

とにかく逃げる事だけに集中しよう、そうしよう

「そうだ！もと来た道を戻ろう！アタッコ先生が俺達を殺しに・・・探してるはずだ！」

「もと来た道覚えてる人います！？」

・・・だめだこりゃ

「ちょっ、もう・・・む、り・・・」

「おい！へばるな！」

「ア、アスール！どんどん距離が縮まってるよ！」

もう、無理か？そう思った瞬間

「諦めるなアスール、これを！」

何処からか聞いた事のある声が聞こえたと思ったら、目の前に銃が落ちてきた。

「くっ・・・」

ドンッ！ドンッ！

それを拾い、魔獣に向かって何発か発砲した、何発か打ち込んだが少しひるんだぐらいだった。

「てか、これ俺の銃じゃん、なんで・・・」

死ぬほど嫌な予感がした、銃は寮に置いてきた、そして俺の部屋は一人部屋、鍵は俺ともう一人しか持っていない・・・

つまり・・・

「やはりただの銃弾じゃあ倒せないか、それじゃあ・・・」

赤い髪、赤い目、制服と鎧を融合した奇妙な服、間違いないこいつは・・・

「ロツ・・・ロツソ・・・」

「猪め、私の大切な人によくも・・・」

やべ・・・くるぞ・・・

「喰らうがいい・・・我が家系に伝わる系統魔法・・・【Z】《スラッシュ》！」

ロツソはその場でただ剣を振るった

刹那、猪は文字どうり真っ二つになり、その場に倒れた。

「す、すごい・・・！」

「あいつ、Aクラスのロツソ！？なんでこんなところに・・・」

ロツソはものすごい剣幕でこちらへやってきた、そしていきなりベルデの胸倉をつかみ上げた。

「ベルデ、お前ならベヒモス程度の魔獣なんて余裕で倒せるだろう、なぜ戦わなかった」

「・・・放せよAクラス主席、お前は俺を買いかぶりすぎだ、俺はお前見たいな魔法は使えねえよ」

「・・・まあいい、それよりもアスール」

「エ、ナ、ナニカナ？」

ヤバイ、逃げようかな？逃げちゃおうかな？

「アスール、先生に聞いたぞ、授業をサボったんだそうだな、しかもこんな所まできて」

「い、いやあ、それはそのー」

「しかも、今の敵、もし私が間に合わなかったらどうするつもりだったのだ」

「・・・まあ、どうにかなるかなーと」

「アスール！」

ビクッ

殴られるかも、そう思い、体をこわばらせた瞬間

フワッ

・・・抱きしめられた。

「アスール、頼むから無茶はするな、お前が大怪我なんかしたら私は・・・」

「ロツソ・・・ごめんな、もう無茶はしない、約束するよ」

「・・・約束だぞ」

ヒソヒソ

「な、なんかアスールが気持ち悪いぐらい素直だ・・・！」
「なんか見ててムカツクかも」

「ロッソさん、大胆ですね」

見んじゃねえよ、コノヤロー

「それじゃあホラ、皆帰ろうか、日が暮れてしまうぞ」

「は、はい！」

こうして俺達はどうにか危機を乗り越えた、ほぼロッソのおかげだったけど

その後アタッコ先生にフルボッコにされたり、今日の礼代わりに色々相手しろとかいってロッソに寮に押しかけられたりと色々あった。約束もしちゃったし明日は真面目に授業受けるかな、と思いながら眠りについた。

「ベルデ」

「なんだよ」

「次からは、ちゃんとアスールを守れよ」

「わかったって言ってんだろ」

「わかってない、もしもアスールが死ぬような事があれば・・・」

「わかったわかった、守りゃいいんだろう、次からは気をつけるさ」

「・・・わかった、だが明日からは私も一緒に行動する」

「マジか」

「ああ、もしアスールになにかあったら・・・」

死ぬぞ、
私たち

第?話 朱の騎士（後書き）

意見、感想等よろしくお願いします。

第？話 校長と失われる日常（前書き）

急☆展☆開

第？話 校長と失われる日常

「・・・ということで魔獣の特性というのは・・・共通の弱点とは・・・」

どうもアスールです、先日魔獣に襲われました。

現在は魔獣学の授業を受けている、だいたいは一学期の内容の復習だが。

まあ、その辺はどうでもいい、問題は俺の隣りと後ろにいる奴だ。

「ほらアスール、ここ、字が間違っているぞ直しておいてやろう」
ケシケシ

「EクラスもAクラスと授業内容は変わらないのですか、私がいな
い間に色々変わりましたねえ」

シミジミ

「あの、もうちょっと離れてくれませんか？ちよっ顔、顔近い」

なぜか俺は幼馴染と校長、二人に観察されていた。

事は二時間前に遡る・・・

「それでは出席をとりまーす、アスール君」「はい」

Eクラスの担任はディフェーザ先生だ、このクラスの唯一のいいところである。

「アマリジョさん」「はい」「グリース君・・・ベルデ君・・・」

ロサード君……ロッソさん」「はい」「まてコラ」

「何だアスール、何か問題があるのか？」

「大有りだ、お前Aクラスだろ、何でこのクラスにいるんだ」

「クラスを変えてもらったのだ、お前を見守るためにな」

いや、無理だろ。

この学校のクラス編成は実力で決まる、学期末に試験がありその結果でクラスは上下するがAからEに落ちるなんてのはまずない。

「……まさかベルデみたいにかやつちまったか？」

こいつに限ってそんな事はないと思うが。

「ああ、それに関しては私が説明しよう」

……え、誰？

なんかオールバックのカッコいいお兄さんが出てきたよ。

ディフェーザ先生は下がり、謎のお兄さんが教卓に立った。

「えー、皆さん、多分初めまして、魔法学校エテルノ【校長】レイ・クリエイターです、皆さんよろしく願います」

「こっ、校長？」

校長？エテルノの校長はもう何百歳というじいさんのはずだ、このエテルノができてからずっと校長は変わっていない、この人が校長？どう見ても二十代前半だ。

「Aクラス、ロッソ・ドラゴネは本日よりEクラスに転入します、これはもう決定事項です、異論、反論は受け付けませーん、あと」「あと？」

「本日よりアスール・レオン、あなたは【観察対象】になりました、
当分の間は教師陣により監視されると思います、ご了承ください
い」

え？

「あ、本日は私があなたを監視いたしますのでよろしく願いしま
す」

「ちよっ、待ってください何で俺が」

「詳細はそのお伝えします、とりあえずいつもどおり過ごして
くれれば結構です」

「そ・・・そんな・・・」

この日を境に俺の日常は奪われるのだった。

第？話 校長と失われる日常（後書き）

御意見、御感想等よろしくお願いします

第？話 覚醒 1（前書き）

今回もヒロイン出てきません。

第？話 覚醒 1

どうも、先日から監視される事になりました、アスールです。
監視されてから一週間、今日も何事もなく平和な事を祈る。

「無理無理絶対無理！なんであたしとロサードがペア！？勝てるわけないでしょーが！」

「まあ、無理だわな」

「手も足も出ませんでしたよ・・・」

今回の授業は例の森で対魔獣戦の授業だ。

授業内容はディフェーザ先生の作った魔法障壁の中、二人一組でランクにあった魔獣と戦うというシンプルな授業だ。

障壁内にはアタック先生が控えており安全対策もバッチリ、自分の番が回ってくるまで自由行動、生徒には人気な授業だ。

「アスール、次、僕達の番みたいだよお」

「おう、行くか」

今回俺のパートナーはグリースだ、こいつとはそこそこ息も合うからやりやすい。

「おうバカコンビ、ベヒモスに追われた感想はどうだ？今日の訓練も見物だなあオイ」

「大丈夫っすよ、それにベヒモスとクーシーじゃランクが違いすぎますって」

ちなみに魔獣にもランクはある、魔獣とランクが同じ奴が2〜3人いれば対等、優性で戦える、なのでこの訓練も必ずペアで行うのだ。

今回の相手はクーシー、牛のような姿で角が三本あり気性が荒い、ランクはEで魔獣の中じゃ最下級クラスの弱さだ、アマリジヨ達は負けたが。それとこの前戦った（ロツソが）ベヒモスはCランクだ。

「クーシーが相手かぁ・・・どうしよう」

「クーシーぐらいならお前一人でも行けるだろ、お前がクーシー抑えておいてくれれば俺がトドメを刺してやるよ」

「じゃ、そうしようか」

いきなりだがここで俺の武器の説明をしておこう。

以前俺の武器は銃と紹介したと思う、この世界に銃主には二種類存在し、一つは銃倉から弾を撃ちだすタイプ、もう一つは弾は存在しなく自分の魔力を弾として撃ちだすタイプの二つがある。両方とも高価で一挺で小さい家なら買えてしまうぐらい高い。

しかし、俺はそんな銃を二挺持っている、一挺は俺を産んだ時に死んでしまった母親の物、もう一挺は俺をロツソの家に預けどこかに消えた父親の銃。

ロツソの父曰く有名な魔獣ハンターだったらしい、二人とも顔も覚えていないが。

「それじゃあ準備はいいな？それじゃあ・・・訓練開始！」

掛け声と同時にアタッコ先生が押さえつけていたクーシーが解き放たれた。

「よっし、いっくぞおおおおお！」

グリースがそう叫んだ瞬間、グリースの体から灰色のもやののようなものが出てきた。

「ふんぬうううう！」

正面から突っ込んできたクーシーの角をつかみ動きを止めた、これがグリースの得意とする身体強化魔法だ、体に直接魔力を纏わせ身体能力を強化する魔法だ。

「さすがグリース、さつさと終わりそうだ」

そして銃を構えたその瞬間、異変が起きた。

「えっちよっ・・・うわああああ！」

「なっ、なんだよこりゃあオイ！」

クーシーの体が何倍にも膨れ上がり、グリースを吹き飛ばした。

「な、何が起こって・・・」

その瞬間、声、が聞こえた。

『コゾウ、オマエ、ナニヲシタ？チカラガ、ワキデテクル』

「え・・・？」

魔獣が・・・喋った？

『チカラ・・・モットヨコセ・・・』

「逃げて！アスール！」

グリースがそう叫んだ時、クーシーは俺の目の前で角を振り上げようとしていた。

第？話 覚醒 1（後書き）

御意見、御感想等よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4091v/>

逃げ腰男と女騎士

2011年10月9日13時37分発行